

ささえあう

2009年
12月15日
第11号

事務局 大分市大字森679-6 リフォーム夢舎内 TEL・FAX097-527-5443

関係者のコラボレーションに感銘

大分に来させていただいて2年目ですが、当ネットワークの事務局会議、理事会には、毎回大きな感銘を受けています。

それは、統合失調症、てんかんの当事者団体、家族会、学識経験者、病院関係者、福祉関係者、企業などが見事にコラボレーションし、毎回、活気あふれる会議、セミナー、フ

ィーの就労をテーマにしたフォーラム、セミナー、研修会が開かれています。

それは、厚労省委託フォーラムの開催を受けて大分精神障害者就労推進ネットワークが活動してきた5年余の大きな成果であり、フォーラム、セミナー、研修会が開かれるたびに、新たな精神障がい者雇用の芽が、県内各地で勇気と共に発しているのでしょう。

”世の変遷と大分の底力”

ネットワークも企業も先駆的

大分障害者職業センター所長 青柳智夫

フォーラム、機関誌づくりが、ポジティブに継続されているからです。

課題は多いけれど

統合失調症、てんかん、うつ病等の方々の雇用は、平成18年4月に精神障害者保健福祉手帳所持者が雇用率にカウントされるようになったことを機に、やっと少しずつ、企業での雇用の可能性が広がってきましたが、精神障がい者雇用を安定的に推進するために不可欠と言われている、

- ①企業内での研修（幹部、現場それぞれ）、
 - ②受け入れ職場での複数の担当者配置、
 - ③外部のジョブコーチを活用しての雇用、
 - ④外部の支援機関、支援者との勉強会、
- などは、まだまだ進んでいないのが現状です。

フォーラム・セミナーで雇用の芽

そんな中、大分県では、いくつもの機関が問題意識を持ち、毎年3～5カ所て精神障が

10社のうち3社が取り組み

先日行った、あるハローワーク管内での事業主支援ワークショップ（大分障害者職業センターが主催する障がい者雇用に関する事業主懇談会）では、ご参集いただいた10社のうち3社から、精神障がい者雇用に関する取り組みの話を聞くことができ、大分の企業の先駆性に、舌を巻いたところです。

互いに知恵を出し合って

我々、障害者職業カウンセラーの現在の職務は、全国を回って障がい者雇用の促進、維持、および障がい者の職場復帰の支援をすることですが、大分県で行われているような先駆的な取り組みが、日本全国で行われるよう、ノウハウを身につけ、PRを推進したいと思います。

今後とも、互いに知恵を出し合える、共有できる関係性を保ちたいと考えます。

どうか、よろしくお願いします。

「生きちょっとよかった!」

有機農園・スローカフェ・雑木林・癒やしの空間・子どもの遊び場・リサイクル etc.

“ぶらぼうファーム”の夢あふれる仕事づくり

きめ細かな就労支援も模索しながら

大分市庄の原の見晴らしのいい高台にスタートして1年。広大な敷地にカフェと農場を合わせ持ち、貸し農園や子どもの遊び場も備えている『ぶらぼうファーム』を訪問しました。

ぶらぼうファームでは現在、7名の精神障がいがある人たちを雇用しています。トライアル雇用制度も活用し、最低賃金を保障して、農作業とともに、パイ焼き窯やテラスを作ったり、創意工夫をこらしながら夢あふれる農園づくりに懸命の毎日です。

「窯ができたときはうれしかった」と笑顔の“やりちゃん”は働き始めて間もなく1年。病院のデイケアに通っていて、この仕事を進められたそうです。野菜の種を蒔いて、収穫まで手をかける。実家の農業を受けつぎ結婚するのが夢ですが、今は「したいことができ楽しい」。

「イタリア人のシェフからケーキやクッキーの作り方を習った」というレストランスタッフの“あーちゃん”。デザート作りを担当し、「おいしいといわれるとうれしい」とやっぱり笑顔です。「仕事をしたかったけど、これまでは『無理』と言われてきた」、でも「ぶらぼうファームは理解があるのでやってみたらとデイケアで



入り口から。ずっと向こうの林も敷地です。

言われて」初めて就労しました。計算間違いや手が震えてコーヒーをこぼしたりの失敗も。「最近、2週間休んだけど、『あなたがいないとデザートが出せない』と言われ、必要とされていると感じた」とうれしそうでした。

実は、ぶらぼうファームには、おいしい野菜を狙ってイノシシがやって来ます。「電気柵を作ってから来んようになった」とちょっと自慢げなのは、その柵を作った“ごとうさん”。グループホームで暮らしていますが、「ぶらぼうファームの仕事の話を聞いて一番に手をあげたんじゃ」と元気いっぱい。アルコール中毒に苦しみましたが、断酒から10年。「意志が強固になった」と言います。以前はアルコールなしでは話ができなかったのですが、今では「ちょっと控えた方がいい」と言われるほどになったそうです。「生きちょっとよかった」という言葉と顔や手の



シワに人生の重みを感じました。

この場を企画し、作り上げてきた中心にいる神田道子さんは、「夏はとても暑いし、冬は寒いので、外の仕事は大変。でも来た人に喜んでもらえる農園づくりという夢をみんなで共有しているから続いていると思う」と話します。でもそれだけではありません。夢を実現するためのいろんな工夫がありました。

「精神障がいがある方が働き続けるためには医療との連携が欠かせません」というのが第一。「薬を知って、一人ひとりの体調を見ながらアドバイスしています」と言います。そして、「間に入る支援者も重要」と指摘します。ぶらぼうファームの場合、フライハイムの精神保健福祉士の白石さん等が頼りになる存在になっています。それだけではありません。朝、仕事始めのミーティングでは仕事の約束をみんなで声に出して読み上げます。夕方、仕事の終わりにはそれぞれ感想を話し、スタッフがノートに記録します。それでも、「模索の連続」というのが現実。「でも、いい表情で喜んで仕事をしてくれるのを見ると、私たちががんばらねばと思うんです」と神田さん。

課題の経営確立のため、今計画しているのがクッキーやケーキを作る工房の新設。城崎町に場所を確保し、現在求人中です。就労継続と就労移行支援の事業所として、ぶらぼうファームと連携して、野菜など材料づくりから製品販売

まで一貫して取り組み、収入も増やし経営を成り立たせたいと話します。意欲十分の神田さんですが、ほんの一言「もう少し行政の支援体制が整っていれば」というつぶやきも聞かれました。

働く人、雇用する人、支える人 —

それぞれの「いい仕事をしたい」「人の役に立ちたい」という思いが繋がって、あたたかな場所の創造が始まっていることを実感できた訪問でした。

場所は大分市庄の原2-1

(スローカフェでは食事や喫茶を提供しています)



雨水をためるタンク。イラストや創意工夫が楽しい。



力を合わせて作った窯の前で

安部綾子事務局長の感想

未来に不安を感じながらも今を大事にしたいという気持ちで働かれている皆さんにお会いして、いろんな支援が必要だと感じました。「自分を必要としている人がいると頑張れる」と言うあ~ちゃん、「高いところで仕事するのが好きで木工班で屋根等を担当しているが農業はストレスがたまっていやだ。ぶらぼうファームは自分のやりたいことをやらせてくれるので楽しい」と自分の気持ちをしっかり伝えることで企業主の理解が得られ仕事が継続できている人、自分で植えたハーブの名前を全て覚え仕事に自信をつけ頑張っている人、皆さん笑顔で自信たっぷり答えてくれました。「今日は自分の気持ちをゆっくり聞いてくれて嬉しかった。気持ちが晴れ晴れとした」とごとうさんが言われた時に、傾聴することも支援の一つだと思いました。

それぞれの個性を見つけ仕事の割り振りが出来るまでに時間を要すること、毎日、仕事が続けられるようにと体調管理への配慮、全てを企業任せではとても無理だと感じました。

障害者を雇用したいが、どのような仕事ができるのかと問われる企業の方もいて、実際雇用されている方も、手探り状態でどの様に支援、指導すれば良いのか迷っています。

企業、医療、福祉、保健、施設、家族が協力して手を取り合って支えていかなければならない問題だと思います。精神は福祉の分野で遅れていると言われますが、遅らせている原因は何なのか、早急に取り組まなければならない問題は何なのか、皆さんと一緒に考えていければと思います。



「働いています！」続報 エンパワメント・アプローチ

大分県湊泉寮

日出町藤原4 6 1 7
0977-72-2521



エンパワメントと班長制度

当寮に併設されている福祉農園ハイテク（就労継続支援B型事業／以下、ハイテク）では、ミツバの水耕栽培と花苗の栽培をしています。

ご利用者の多くは当寮を退寮した方で、心の病をもっています。グループホームやアパート生活をしながら、ハイテクに通っています。

私が作業支援の中で特に気になっていたことは、ご利用者の方々は声が小さく、元気のないことでした。心の病の一つの症状ではありますが、作業所での支援体制を工夫してみる必要もあるのでは、と考えました。

そこで、ご利用者の方々と相談した結果、『班長制度』を作業に取り入れることにしました。ミツバと花苗の各作業を細分化して17の作業班をつくり、ほぼ全員の方々が班長になりました。

個々の潜在的な力や可能性を信じて、それぞれの強みを強化することにより、自分自身の力で課題を解決する力を支援する、エンパワメント・アプローチの視点を重視しました。



班長制度の効果は・・・

班長制度を導入して4ヶ月後、ご利用者全員にアンケート調査を実施しました。

その結果、「やる気の高まりや作業の段取りを考えるようになった」というご利用者が半数を超えました。班長制度の存続についても70%の賛成意見がありました。

あるご利用者の方からは「もっといろいろなことができるような気がしてきた。」という前向きな意見も聞かれました。Aさんは、それまで職員が行っていた朝終礼の司会を引き受けてくれています。また、出荷台帳を見て、出荷する花を決めたり、値段の確認をするようになりました。



職員の意識変化

職員の意識にも変化が現れました。

班長制度導入前よりも、ご利用者の良い面や改善されていく面に視点が向くようになりました。ご利用者主体の作業所づくりのために、作業に関する情報の共有化を図り、ご利用者の皆さんと職員とが話し合っ物事を決定して実行するようにしています。

取り組みは始まったばかりです。利用者の方々と職員が同じ作業所で働くスタッフとして認め合い、お互いによりよい作業所づくりに頑張っています。



○多目的室：休憩室でもあり、会議室でもあり、皆さんの憩いの場です。

（滝口裕子）

ソーシャルリフォーマーになりたい私



— 私の立場 —

別府大学文学部人間関係学科 三城大介

社会改良への夢

早いもので、精神障害者就労推進ネットワークとの関わりは、その準備段階から数えると今年で4年目になります。三城がなぜこの活動に関わったかという、それは、ソーシャルリフォーマー（社会改良家）になることを夢見ているからです。

ソーシャルリフォームとは、18世紀の終わり、ソーシャルワーク黎明期から生活困窮者や社会的弱者の権利獲得や生活のしやすさを求めて繰り広げられてきた運動で、その黎明期には貧困やスラムの解消、マイノリティの社会的権利獲得を目的にしていました。やがてこの運動は、コミュニティワークやコミュニティオーガニゼーションへと分岐し、現在のソーシャルワークに影響を与えつつ発展していきます。

ソーシャルリフォームや社会改良なんて言葉を使うと、まるで大言壮語のようにしか映らないかもしれません。しかし、動き始めなければ何も変わりません。

“早期解散” 願いながら!?

三城自身は、精神障害者の就労と地域生活の安定した継続を目指すこのネットワークが、一日も早く解散することを切望しています。それは、3年間やってきて疲れたから辞めたくなった訳ではありません。このネットワークが解散するということは、精神障害者が暮らしやすい地域に変わった（改良された）ことになるからです。

しかし、「精神障害者の・・・」とか「心の病を持った人の・・・」といった具合に、精神障害があることを限定的な対象にした活動や論議をしなくてはならないのが現実です。それは、そ

のことを問題にしなければならないほど、心の病を持った方たちの地域生活や就労のあり方が閉塞的であるといえます。

地域の仕組みづくりめざし

この現実を変える（ソーシャルリフォームする）ためには、公的なサービスや地域精神保健医療・民間の活動などのさまざまな社会資源が連携して、精神障害者の生活のしやすさに役立てられるような地域の仕組みを、多くの方々に関わっていただいて作ることが重要でしょう。

また、こういった地域ネットワークの活動（三城的にはソーシャルリフォーム）は、このネットワークの場合で言えば、こころの病を持った人のためだけの活動であってはならないとも考えています。私たちの生活は常に変化しています。地域社会で暮らす私たちには、解決すべき課題が常にさまざまな形で立ち表れてきます。そして、今の課題が心の病を持った方々の仕事や生活であるということです。

柔軟なネットワークに

その変化の中で表象として立ち現れる諸問題に対峙できるネットワーク（地域の多くの方々の意識や力が集うもの）は、今後とも必要になってくるでしょう。

こういった意味合いで、ネットワークの早期解散を切望し、ネットワークの活動が心の病を持った人のためだけの活動にならないことを願っているのです。

三城的には、このネットワークが、地域の中で立ち現れる生活の諸問題に対応できる柔軟なネットワークとして作用し続けることを願っていますし、その中の末席に三城が居ることができれば、三城はソーシャルリフォーマーを夢見続けることができるような気がします。

「朝市」を通して広がる理解の輪

— 地域の理解を模索するなかで生まれた障がい者と地域の交流 —

生活訓練施設フライハイム 白石一徳

5施設と2自治体も参加

「朝市」に取り組み初めて1年半余り、最初は職員3名、利用者5名の体制でのスタートでした。それが今では、2つの団地で5つの施設と2つの自治体が参加して行われるようになりました。大分市内の宗方台と松が丘団地でそれぞれ月に2回ずつ開催しています。

きっかけは2年前に大分精神障害者就労推進ネットワークの主催で開かれた「精神障害者就労推進フォーラム」（2007年12月）でした。精神障害者の就労には地域との連携が重要であるという事に気付かされました。地域と連携するには、まず地域のニーズを探し出すこと、次にそのニーズに障害者をどのようにマッチングさせるかと考え、大分市での地域のニーズ探しを始めました。

難しかった周囲の理解

フライハイムは、仲宗根病院の併設施設で大分市内の小野鶴という地域にあります。30年前までは周囲に何もなくて閑静な風景が広がる所でした。しかし、大分市の分譲住宅団地の開発やインフラの整備、さらには郊外型の大型ショッピングモールなどの進出により周りの環境は一変してきています。利用者が地域住民と出会う機会も増えましたが、地域の方からは「病院の患者が出ている」などの言葉を聞き、利用者には肩身の狭い思いをさせていたように思います。入院治療を終え精神的に安定した状態になりながら、社会復帰・生活のリハビリを行っていることへの周囲の理解は難しく、どうしたら



よいのかという思いでいました。

団地の高齢化を知って

そのような中、大分大学の研究報告会「福祉で町おこしin大分」で、高齢化してゆく団地の実態を知りました。コミュニティ調査の結果は住民の約3割が高齢者であり、その多くが単身世帯や2人世帯でした。日常生活においては自動車の運転ができなければ普段の買い物にも行けないような状況でした。私が調査内容の中で注目したのは「団地内で参加したい事業」です。

「祭りなどのイベント」「定期的な食事会」「趣味の会」、「健康作りや介護予防の会」などの中に「定期的な朝市」がありました。

壁は自分のなかにも

フライハイムでは開設以来、利用者と共に農園作業を行っていましたが、収穫した作物は法人内での使用や、近くのカソリンスタンドでの販売ということでしか利用していませんでした。この野菜を「朝市」という形で地域の方に提供しようと思いついたのです。しかし、「地域の方々は、精神障害者の野菜販売を本当に受け入れてくれるのだろうか？」という不安がありました。

周辺の団地をまわってみて、規模や販売場所から宗方台団地に着目し、自治会役員さんへの説明会をお願いしました。その日に備え、住民の方へのご案内文、野菜販売のチラシ、利用者の作業風景写真、農園の写真、実際に採れた野菜をお土産として持参しました。説明を行っての感想ですが、快く了承していただき「こんな単純なことなのか！」と今まで悩んでいたことが何だったのか、また自分自身が勝手に壁を作っていたことに気付かされました。

「緊張」が「やる気」に

それから第一回目の朝市まではあっという間

でした。色々な不安を抱えて迎えた当日、開始時間前には地域の方が集まり始め、利用者に緊張が…またその緊張が職員にも伝わってきました。利用者の「今からフライハイム朝市を行います」との掛け声でお客さんが殺到します。スタッフも圧倒されましたが、混乱した一人の利用者が後ろを向いて手を叩きながら「いらっしゃいませ」を言い続けていたのを今でも思い出します。ものの10分で用意した全ての品物がなくなってしまいました。

その日のうちに反省会を行い、利用者からは「大変だけど達成感がある」「あんなに人が来てびっくりした」「期待に応えたい」「準備などにやる気が出た」「やっぱり緊張した」「お年寄りが多かった」など様々な意見が出て、今までに無い活気ある反省会となりました。反省会での利用者のアイデアや意見を取り入れ、朝市は毎回スタイルを改良・向上させながら行っていました。あまりのニーズの高さから「もっと地域の方の役に立ちたい」と6月からは月2回、第2木曜日と最終週の木曜日に行うこととさせていただきます。

農業振興にも一役

4月からスタートした宗方台団地の朝市も7月には噂が流れ、隣の松が丘団地の自治会の皆さんが見学にみえて、「うちの自治会でも行ってもらえないだろうか」と相談を受けました。7月25日、8月12日と試験的に行って様子を見たところ、松が丘団地の規模は宗方台団地の約2.5倍ありましたので、通常の1.5倍の品物を用意しましたが2回ともあっという間に無くなってしまいました。また、かねてから「障害者（身体・知的・精神）の理解の為に」との思いもありましたので、松が丘団地で朝市はフライハイムだけで行うのではなく、他の施設にも参加していただきたいと知的障害者の施設、精神障害者の施設にも声をかけさせていただきました。松が丘自治会の方にも快く了承していただき、現在では農業振興をめざす自治体も参加し、「朝市」はそれぞれの思いを乗せて様々な広がりを見せています。



公園清掃・除草作業も引き受け

朝市を行うようになり、自治会の方々から様々な相談を受けるようになりました。高齢化する団地では、公園の清掃にも手が回らない状況であること、住宅団地の空き地の除草作業が出来なくて困っていることなどです。現在は、年3回2つの公園の整備、空き地は年2回8箇所除草作業を行っています。また、自治会行事への参加も受けるようになり、夏の盆踊り大会での力キ氷は大変好評でした。活動の場は、少しずつ地域へと広がっています。

社会に触れることで、今まで施設内で完結していた生活が、徐々に広がりを持ち、利用者の皆さんにも「地域で暮らしている」と実感していただきたいし、また行動や意識にも責任・自律を持っていただきたいと思っています。障害者の暮らしやすい地域は、きっと誰もが暮らしやすい地域なのではないでしょうか。

ネットワークの大切さ痛感

この取り組みはまだ始まったばかりですが、色々な方の力を借りてここまで継続することができました。今はネットワークの大切さを感じています。今後どのような展開があるのか、手探りの状態で不安ではありますが、期待もしています。

今回、地域の方々とコミュニケーションをとるようになって利用者の皆さんには、やりがい・達成感・自信が芽生えました。これらの気持ちをまた新たな環境のもとでも発揮していただきたいとも思っています。

報告 第2回全国精神保健福祉家族大会～みんなねっと長崎大会～ 藤波ネットワーク代表の報告に大きな反響

10月29、30の両日、長崎市で第2回全国精神保健福祉家族大会「みんなねっと長崎大会」が開かれました。テーマは「長崎から家族会活動の新しい息吹を」。特定非営利活動法人全国精神保健福祉会連合会、県精神障害者家族連合会が主催し、精神障害者が地域で生活していくことや就労支援などについて全国から参加した多くの人たちが一緒に考えました。

第2分科会のテーマが「就労支援のこれからをどう展望するのか～もっと精神障がい者が働ける社会に」。精神障がい者の「働きたい」気持ちを受け止め、多様な働き方を模索する動きは徐々に本格化しつつあるとの立場から、これからの就労支援をいかに進めるか、地域の実情に合わせた取り組みや工夫、ネットワーク化等、従来の支援モデルを脱却した新たなモデルを考えようという分科会です。この分科会で、ネットワークの藤波代表が発題者として大分の就労の取り組みを報告しました。一部を紹介します。

私たちは「精神障がい者が地域で働くことは、当たり前のこと」だと考えています。働くことは、収入を得ることになる、自立を進めることにつながるということだけでなく、それ以上に大切なことがあると思います。それは障害を持つ当事者の思いです。仕事をして地域の人とふれ合ったことで、「私も人の役に立つことができる」、「自信がついてきた」という声を多く聞くようになりました。「病気の回復にもつながっている」という話も聞きます。精神障がい者が地域に出て行くことで、地域の人たちの理解も広がります。朝市

で野菜を運んでもらった高齢者は、精神障害者もやさしい普通の人だと思うようになりました。雇用した企業は、「一生懸命働いてくれる」と評価しています。ただ、そのためには理解と支援が必要です。より多くの障害者が地域で働いて暮らすためには、地域に広がる支援のネットワークが必要です。いろんな立場の人たちの理解と支援のネットワークを広げることが地域での自立への支援になる。私は、大分精神障害者就労推進ネットワークの3年余の活動を通してそう感じています。

就労継続支援の事業所を運営しながら、地域の行政や企業にネットワークを広げ、県内各地にネットワークを広げてきた藤波代表の活動の報告に参加者の反響は大きく、終了後、多くの人から声をかけられ、手紙の反響やお礼も寄せられました。埼玉県と佐賀県からのお便り（抜粋）を紹介させていただきます。

●埼玉県からのお手紙

立派な資料をいただき誠に有り難うございました。大変な努力で会を発展させてこられた事に敬意を表します。埼玉やまぶき会もこれを手本にがんばりたいと思います。

●佐賀県からのお手紙

当事業所はB型として2年目になりますが、現状に追われて手が回らない等、言い訳ばかりの私にとって目からウロコ、努力次第で何とかなるという勇気と希望がわいてまいりました。これから、当事者やいろいろな関係機関との連携を大切にしながら一歩ずつ前進して参りたいと心新たにしました。

編集後記

不況のなか、障がい者の雇用をめぐる情勢も厳しいものがあります。しかし、今号の誌面では新たな可能性を感じていただけたのではないのでしょうか。就労希望者が50人に達したL.L.C.ハートブリッジでも新事業を構想中です。11月20日に大分市で開かれた職業リハビリテーションフォーラムでは地場大手の企業から訓練受け入れや管理者への講習などへの具体的な意欲が示されました。もちろん課題は山積、支援も不可欠です。地域で連携を広げましょう。（〇）